

# 研究紀要

《研究主題》

**自分の考えを、自分の言葉で表現できる子どもの育成**

～なかまと共に学び合い、「わかった」「できた」を実感できる授業を創造する～



令和4年11月11日（金）

名張市立梅が丘小学校

## あいさつ

コロナ禍の学校教育活動は3年目を迎えました。本年度は、実施可能な教育活動を少しずつ再開しています。たてわり班掃除も再開し、高学年が他学年の児童に親切に掃除の仕方を教え、皆で熱心に掃除に取り組む姿が見られます。授業は落ち着いた雰囲気学びを深めています。これは、本研究テーマを掲げ全ての子どもの授業への参加を目指した授業改善の取組と、「チャイム・あいさつ・おもいやり」の継続した実践の成果であると感じています。本研究をこのように多くの皆様方に発表させていただく機会を得たことに感謝し、ご覧いただく皆様方に、是非とも忌憚なくご指導ご助言賜りますことをお願いいたします。

最後になりましたが、本校の研究推進にご指導ご助言を賜りました三重大学教育学部教授 守田庸一先生、日本授業UD学会の諸先生方ならびに名張市教育委員会学校教育室の皆様方に深く感謝いたしますとともに、地域の皆様をはじめご支援いただいておりますすべての皆様に心より御礼申し上げます。

学校長 森永 美紀子

## 研究主題

自分の考えを、自分の言葉で表現できる子どもの育成

～なかまと共に学び合い、「わかった」「できた」を実感できる授業を創造する～

## テーマ設定の理由

本校の児童は、明るく元気で、大きな声であいさつができる児童が多い。本校では一昨年「チャオ」(チャイム・あいさつ・おもいやり)を合言葉に取り組んできた。児童はこの合言葉をしっかり守ろうとし、チャイムが鳴った時には着席をしている児童が多い。おもいやりは様々な場面で変化をするが、本校では、時間いっぱい掃除をすることをおもいやりの具体としてとらえている。児童は異学年と一緒に掃除をし、高学年は低学年に優しく掃除の仕方を教える姿がよく見られる。しかし、生活の中で自分の思いをうまく伝えられず、トラブルとなる場面は少なくない。学習の場では、多くの児童が落ち着いて学習に取り組むことができている。一方、45分の授業の中で、何をしようのか分からない児童や、何をしようか分からないため授業に集中できない児童、自分の考えを伝えることを苦手としている児童、課題に対して理由つけて考えを書くことが難しい児童などの姿が見られる。そのため、学力の差が開いているように見られる。

これらのような児童の実態から、「授業のユニバーサルデザイン化」(シンプルで焦点化された課題設定。タブレットやセンテンスカード、写真、挿絵を活用した視覚化。ペア学習を中心とした考えの共有化。)を研究の柱と位置付け、国語科説明文を研究領域の切り口に、研究を進めていくことで、**仮説①**「焦点化されたためあて(課題)を提示することで、児童全員に主体的・意欲的に授業に参加する力が身につく。」**仮説②**「ペア学習を中心とした共有化を図ることで、相手に自分の考えを伝える力が身につく。」と考える。

国語科は、明確な答えを読み取ったり、多様な考え方を比較し伝え合ったり、物事に対して批判的に考えたりできる教科であり、言語を使うすべての基礎となる教科である。身に付けた力は国語科のみならず、他教科、生活全般に活用することができると思う。

上記のような、児童の実態や国語科の性質を踏まえ、研究テーマを「自分の考えを、自分の言葉で表現できる子どもの育成～なかまと共に学び合い、「わかった」「できた」を実感できる授業を創造する～」と設定し研究を進める。

## 研究内容

### ユニバーサルデザインの視点を学校活動全体で

#### 《授業のユニバーサルデザイン化の取組》

45分の授業の「焦点化・視覚化・共有化」を図り、すべての児童が楽しく学び合い、「わかる・できる」ことを目指す授業デザインを進めていく。

焦点化とは、45分の授業で何を教えるか、内容をフォーカスし、授業構造をシンプルにしていくことである。そこで、児童全員が授業に参加できることを目指し、提示するめあてに「選ぶ」「分ける」などの具体思考動詞（選ぶ、分ける、並び替える、加える等）を示すことを全校で取り組んだ。

視覚化とは、板書等で目に見えるようにして考える活動を支援することである。児童一人ひとりが主体的に学習に取り組むことができるように、タブレット端末、写真、挿絵、センテンスカードなどを用いて、視覚支援することに取り組んだ。

共有化とは、児童がペアやグループで考えを伝え合ったり、教え合ったりする話し合い活動を組織化することである。本校では、ペア学習を対話の中心に位置づけ、45分の授業の中で、小刻みな表現活動を促すことで、全員の理解の共有化を図った。理解の共有化のために、モデル発言に関連付けて話すように促す「再現・解釈・想像・具体化・抽象化・批評」などの手立てを取り入れた。

#### 《焦点化・視覚化・共有化を進める取組》

昨年度から授業部・基礎学力部・情報環境部の三部会を設立し、校内研修体制を整理した。全員が部会に所属して研究を進めた。

授業部では、児童全員が参加できるようめあてに具体思考動詞を提示することを徹底した。授業の流れとして、「導入⇒展開1⇒展開2⇒まとめ」を軸とし、展開2で児童の主体的な対話を通して中心課題に迫ることができるよう取組を進めた。

基礎学力部では、火・木曜日の昼学習の時間を活用し、対話力を高めるため、which型課題を提示した「どっちっ？」に取り組んだ。

情報環境部では、刺激量の調整を目的とし、教室内の掲示物の統一に取り組み、校舎内に児童の学びの足跡を掲示できる場を整備した。また、視覚支援の方法について検討し、論理の可視化について取組を進めた。



#### 《授業改善を進める取組》

授業改善をめざして、模擬授業形式の事前検討会を行ってきた。事前検討会では、「児童に提示するめあてが焦点化され、児童にとって理解しやすいものになっているか。」「意見の共有化が図られているか。」「適切な視覚支援が行われているか。」を中心に検討した。

事後検討会では、三部会に分かれ、各部会の視点で議論した。授業者は、授業の山場を明確にした「授業参観シート」を作成し、参観者はその授業参観シートを基に、「課題発問の工夫」「対話への工夫」「手立てへの工夫」「教師の指示・話し方」「視覚支援」を評価した。

また、授業者は本時の考察だけではなく、事後検討会の意見を受けて、指導上の留意点について加筆修正し、指導案のリライトを行うことで授業改善を目指してきた。



# 三部会の取組

## 《授業部の取組》

～45分間の授業展開の中で～

### 焦点化

- ・「めあて」に具体思考動詞を示す。
- ・気づかせたい論理にせまる発問
- ・めあてに正対したふりかえり

記号記入 / ( ) 抜き / 理由をつけて文章記入 / タブレット端末使用

- ・一指示一行動

### 視覚化

- ・学習の流れを示す。
- ・センテンスカードや挿絵の活用
- ・センテンスカードや表、罫線、タブレット画面などの色分け活用

### 共有化

- ・ペアトーク（対話） / ウオトーク（ウオーク…歩く + トーク…話す） / タブレット画面等

### 【めあての実践例】

低：3まいのカードをならびかえたりゆを、つたえることができる。

1年『じどう車くらべ』

中：中の要約をするときに 自分の使いたい文を選び、伝えることができる。

4年『世界にほこる和紙』

高：筆者の言いたいことがより伝わる資料を加え、理由を伝えることができる。

5年『固有種が教えてくれること』



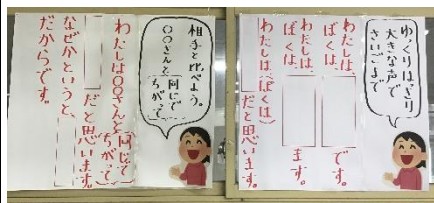
## 《情報環境部の取組》

### 〈教室の掲示〉

- ・授業を行う際には、45分間の授業の流れを黒板に掲示し、児童が見通しをもって学習に取り組めるように工夫をしている。
- ・各教室には、学年に応じた発表時の話型とよい聴き方の姿勢の掲示を行っている。

高学年

低学年



### 〈学校内の掲示〉

- ・2階廊下には、各学年の学びの足跡の掲示を行っている。様々な授業で取り組んだ作品を掲示し、他学年の学びを交流できる場となっている。



### 〈ICT 機器の活用〉

- ・ICT 機器の活用を効果的に行い、テレビに図を示したり、実物投影機で拡大をしたりして、視覚的な支援を行っている。また、タブレット端末を用いることで、自分の考えを整理し、なかまと交流を行い、学びを深めている。



## 《基礎学力部の取組》

### 【どっちっち？お題例】

低学年 ○おすしと焼き肉、どちらが食べたいか。

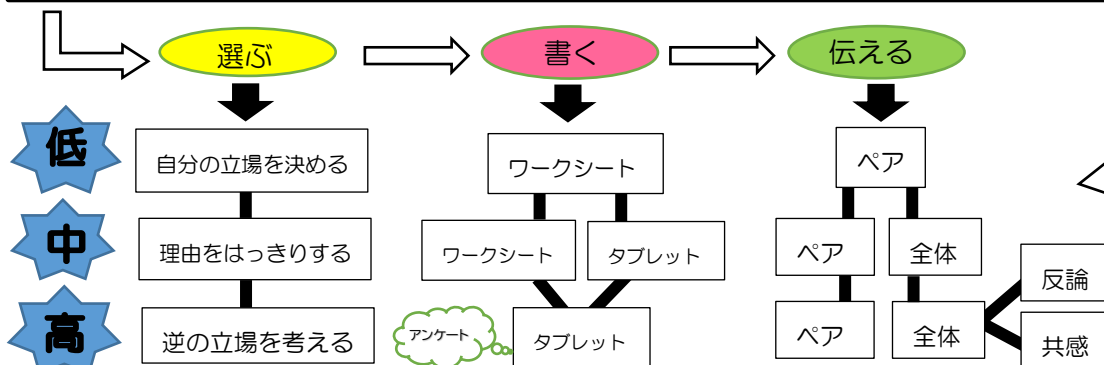
中学年 ○10年後住むなら、都会か田舎か。

高学年 ○学校は給食とお弁当どちらがよいか。

○生まれ変わるなら、そうがよいかキリンがよいか。

○スパゲティを食べるなら、お箸がよいかフォークがよいか。

○もし、あなたがライオンだったら、動物園に住みたいか、サバンナに住みたいか。



【どっちっち？とは】  
 ・2択のお題からそれぞれが1つを選択する。  
 ・対話のスキルアップを目指す。  
 ・風学習に位置づける。

## まとめ

「自分の考えを、自分の言葉で表現できる子どもの育成」を目指し、国語科説明的文章を切り口に研究を進めてきた。授業のユニバーサルデザイン化の三要件である「焦点化・視覚化・共有化」の理論に基づき、どのような支援を行えば子どもたち全員が授業に主体的に参加できるか、国語科の論理を理解できるかについて検討してきた。

今までも授業のめあての提示を行ってきたが、「今日は何を学習していくのか。」「今、何の学習をしているのか。」が分からず、授業に参加することが難しい児童も少なからずいた。そこで、本時の流れを視覚化することを統一した。そのことで見通しを持って安心して学習に取り組むことができる児童が増えた。また、めあての提示にも留意した。「～～について考えよう。」と提示することで、児童は何をどのように考えればよいか分からない児童もいた。具体思考動詞を示すことで、すべての児童が「今日は何を学習するのか。」を理解（課題の共有化）し、授業への参加度が高まった。



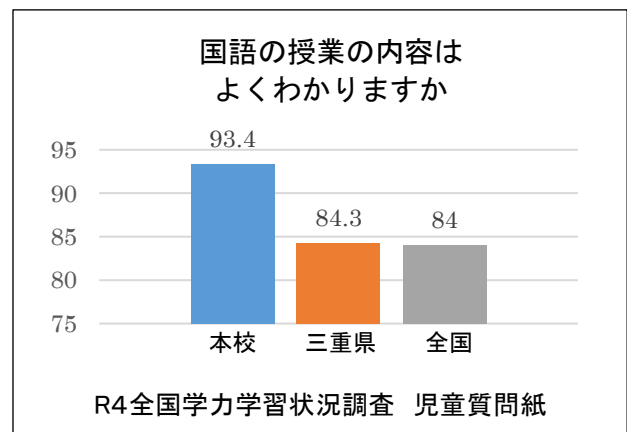
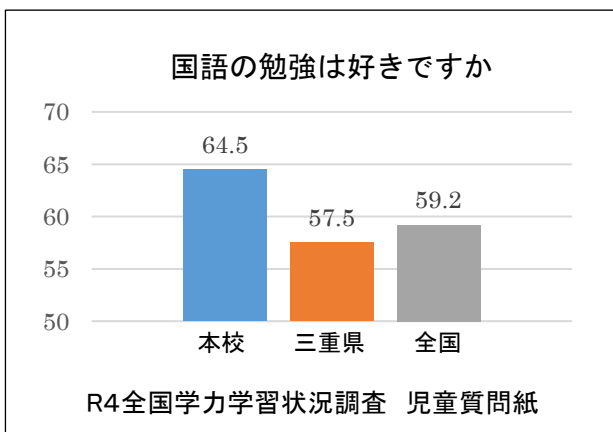
ロイロノートを活用することで、自分の考えを表現することが難しかった児童が、どのように考えているのかを友だちに伝え合う場面が見られるようになった。挿絵、資料の並び替えやセンテンスカードの色分けなどの学習活動に取り組みやすくなり、友だちと意見を比べ、共通・相違を見つけ対話を促すことができた。

本校では、この2年間ペアでの話し合い活動を対話と捉え、研究を進めてきた。火曜日、木曜日に昼学習の時間（13:20～13:30）を設定して、which型課題を提示し、対話の学習「どっちっ？」に全校で取り組んだ。低学年では話型を示したり、高学年ではタブレット端末を活用したりして対話の学習を行った。この取組により、自分の考えや理由の伝え方、説得力のある伝え方、自分と友だちの意見の共通・相違の比べ方などを学習することができた。



昼学習で学んだ対話の基礎を、国語科の授業で活用できるように取り組んだ。理解の共有化を図るために、授業の中で小刻みな表現活動を取り入れた。手立ての一つとして、モデル発言に関連付けて児童の発言を促す発問を取り入れた。「再現（Aさんが言ったことをもう一度言える？）、解釈（Aさんが言ったことって、どういうこと？）、想像（Aさんはなんで〇〇を選んだのかな？）、具体化（Aさんが言ったことって例えばどんなこと？）、抽象化（Aさんが言いたいことは、つまりどういうこと？）、批評（Aさんの考えのいいところは何かかな？）」などの発問をすることで、友だちの考えを受け止め、理解の共有を図った。

**仮説①**「焦点化されためあて（課題）を提示することで、児童全員に主体的・意欲的に授業に参加する力が身につく。」**仮説②**「ペア学習を中心とした共有化を図ることで、相手に自分の考えを伝える力が身につく。」と考え、研究を進めてきた。授業のユニバーサルデザイン化を図ることで、児童アンケート「国語は好きですか。」に全校の約80%の児童が肯定的な回答をしている。今年度の全国学力学習状況調査児童質問紙「国語の勉強は好きですか。」「国語の授業の内容はよくわかりますか。」の項目では、「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた肯定的な回答では、県平均、全国平均を上回り、国語への主体性が高まってきている。しかし、自分の考えを伝えるという点では、依然として課題が残る。そのため、授業の中で意見を共有する場の構造化や、児童同士の考えをつなげていく発問の工夫、意見を可視化するためのタブレット端末の活用方法の検討などを進めていかなければならない。



## 研究同人

### ～令和4年度～

森永美紀子	垣下 智	小川みつ代	柿本 和子	中西 智子
羽後 和子	竹谷 紅葉	藤原 俊介	前田穂乃香	内田 知代
福森 大輝	松本 泰介	松北 千佳	吉岡 憲哉	西川亜梨沙
相樂 有希	高山 大雅	井村健太郎	中岡 理佳	細矢 鷹雅
谷口きよ子	富山ひろ子	岩崎 孝子	高橋さおり	岩森 進
本庄 眞	今奥 夏代	宮部 優	大森 良子	水瀧 美恵
森 ちづる	山本いずみ	森本 律子	芝本 由紀	中出 佳織
定安 美幸	楠野あゆみ			

### ～令和3年度～

赤塚 弘憲	西川 知子	山口 栄子	井口紗玖良	川口 尚子
釘田 遼	森下 ゆか	滝 美幸	益原 直樹	的場 美貴
水本 美佳	八尾智香子	奥出 理加		